

## 感動を音にできる人に

南中学校 3年 折川 愛里

あなたにとって将来の夢とは何ですか。

今、皆さんは人から「将来勉強してみたいこと・あこがれている職業・なりたい職業は何かありますか」と聞かれた時、すぐに答えることはできますか。

もし、私が人から聞かれた時に答えるとしたら、「将来は、聴いている人の心に響くピアノ演奏家・音楽の素晴らしさを伝えることができる優秀な指導者になることが、わたしにとっての現在の夢であり、目標です。」と答えると思います。

夢を実現させるための第一歩として、作曲家を知ること・どのような曲か譜面を読み、作曲者がどんな情景を思い浮かべて曲を作り、表現をしたかったのか、曲のイメージを考えて楽譜の中身を研究することが大切だと考えます。教則本は英語表記もありますが、ドイツ語・イタリア語表記の譜面も多くあるため、英語以外の語学の勉強も不可欠です。

音楽性・ピアノの技術を向上させるために、定期的に、演奏検定・公開レッスン・数々のコンクールに参加し、ピアニストの先生、国際コンクールで活躍している同年代の方々の演奏やお話を聞き、技術の向上を目指します。

オーケストラ・室内楽・コンチェルトなど、ピアノだけではなく、様々な楽器の名前を知り、音を聴くことによって、より深く、幅広く音楽を学ぶことができるので、コンサートに出向くことも多くあります。

また、バロック・古典・ロマン近現代といった時代背景を学ぶことによって、その時代の主な鍵盤楽器・音色を知ることができるので、時代に合わせた曲作り、音作り、強弱やテクニックを活用することができます。4つの時代が集まってできた素晴らしい音楽をこれからも楽しく勉強したいです。

そして、信頼・尊敬される指導者になるためには、音楽の知識・ピアノの技術が優れているだけでは、良い指導者として認められるのは難しいのではないかと思います。そのために、音楽だけではなく、今から色々な分野の方々と交流し、音楽以外の勉強も積極的に行き、幅広い知識が身につくように心がけたいです。

現在、日本社会において、少子高齢化が問題になっています。

その中で、老人ホーム・福祉施設・病院などでは、音楽療法を取り入れ、体の治療を中心として行うのではなく、心と体のケアを一緒に行って、心身の健康・機能の維持改善回復を目指す施設も少しずつ増えているそうです。しかし、まだまだ発展途上の段階にあります。

もし私が社会人になった時、音楽療法を行う施設が増えていたら、色々な施設・病院などに慰問・訪問をして、ピアノの生演奏をする活動だけではなく、色々な楽器を見て、触れて、聴いてもらえるような企画を作り、少しでも身体機能の回復のお手伝いができたら良いと思っています。

聴いている人の心に響く、宝石のようなキラキラとした音楽を届けることができ、感動を音にできる素敵な人になれるように、そして、誰よりも優しく慈愛に満ちた指導者になれるように、日々努力を重ねていきたいです。

## 「藤沢早朝散歩」

藤沢中学校 2年 内田 歩

私が通っている藤沢中学校では、毎年夏休みに「早朝散歩」というボランティア活動が伝統的に行われています。この「早朝散歩」とは、学校の近くにある社会福祉施設の方々と、学校と施設の間を散歩したり、お話をしたりするというものです。私は今年、初めてその活動に参加することに決めました。

ボランティア当日、私の胸は「ドキドキ」と大きな音を体中に響かせていました。『これからどんな事が起こるのだろう……』という期待と、『施設の方々とちゃんと話ができるだろうか』という不安が入り交じったような気持ちを胸に抱え、施設へと向かいました。

その途中、私はふと先生の話思い出しました。

「昨日、他の施設で行われた早朝散歩では、お年寄りの方々が嬉しさのあまり、生徒にハグしたり、涙を流したりして、とても喜ばれたんだよ。」

私は思いました。『大丈夫。私も施設の方々と、楽しい時間を過ごせるはず』数分前まで感じていた不安は消え、『せっかくの機会なのだから思いっきり楽しもう』という前向きな気持ちに変わっていました。

施設に到着すると、車いすの扱い方やお年寄りと触れ合う上で気をつけることなどの説明を受け、いよいよ私が車いすを押す順番がやって来ました。私の胸は、また大きな音を立て始めました。私は、「ふ〜」と深呼吸をして、車いすを押す担当になったお年寄りの方に話しかけました。

「内田歩と言います。よろしくお願いします！」

しかし、返事は返ってきませんでした。私は、予想外の出来事にうろたえてしまい、用意していた話も一瞬で飛んでしまいました。『きっと私の声が小さかったんだ。でも大きな声で言ったはず……もしかして聞こえていないのかな……』色々な考えが頭をよぎります。一緒に車いすを押していた友達も不安そうな表情を浮かべています。私はどうしていいかわからず、そこからしばらく無言の状態が続いてしまいました。

何分か歩いてから周りを見渡すと、施設の方と楽しそうに話をしながら歩いている友達の姿が目に入りました。私は我に返りました。『このまま何も話さずに終わりにたくない』自分に負けたくないという思いで、もう一度話しかける決心をしました。

「いい天気ですね。風が気持ちいいですね。」

すると、小さな声でしたが

「そうですね。」

と、言葉を返してくれました。私は『もっと話をしたい、笑顔にしたい』と思い、積極的に話しかけ始めました。しかし、やっと話ができるようになったところで終わりの時間がきてしまいました。

施設の方とコミュニケーションをとるのは、難しいことだとわかっていました。でも『なんとか楽しませたい、笑顔にしたい』ただそれだけを思って、早朝散歩に臨みました。上手くコミュニケーションをとれたとは言えませんが、一度失敗しても諦めるのではなく、再度挑戦する心の強さを持つことができました。

私はこの早朝散歩を通して、「自分の弱さ」に気づきました。それは、気持ちだけが前に行き、いざとなると行動に移せないということです。今回も、失敗を恐れて行動できない私がいきました。どんな壁にぶつかったとしても、「逃げることなく立ち向かっていく勇気」と、「積極的に行動し何事にもチャレンジすることの大切さ」を痛感した一日になりました。

藤沢中学校が伝統的に行っている、この「早朝散歩」。このようなボランティアがこれから、日本中の中学校で行われていくことを強く願っています。「少子高齢化」という言葉を皆さんもよく耳にしたいと思います。そんな日本を支えていくのは、今の私たちの世代です。私のように、お年寄りとの関わりが薄い、また消極的な人を育て、変えていくのがこのボランティアなのではないでしょうか。今回、福祉に関わったことで、色々な事に気づき、また考えさせられました。日本の将来を担う人間としての責任を感じながら、今後の中学校生活を送り、自分の弱さを克服していきます。

## 将来の夢

上柴中学校 3年 内川 優希菜

私は、今年で中学三年生になり、いよいよ進路や将来のことをしっかり考えなければいけない時期を迎えました。今のいちばんの目標は、もちろん第一志望校合格です。それに向けて、勉強を一生懸命がんばりたいと思います。

そして、将来の夢です。私は、まだ具体的な夢は決まっていますが、人の役に立つ仕事につけたらいいなと思っています。特に、今何となく考えているのが、子どもに関わる仕事です。そう考えた理由は、大きく三つあります。

一つ目は、私の母が幼稚園の先生だったので、その話を聞いて、興味を持ったからです。幼稚園の先生として働いて、楽しかったことや大変だったこと、子どもたちとの思い出など、どれも興味深かったです。また、幼稚園の先生になるまでの過程や、大学の時代の話なども聞かせてくれたので、とても楽しかったし、勉強になりました。

二つ目の理由は、私がかもともと小さい子の面倒を見るのが好きだったからです。私には一人弟がいます。休みの日などは、親が仕事でいない日が最近増えてきたので、二人で留守番することも多くなりました。一緒にテレビを見たり、お昼ご飯を食べたり、たまにケンカもしますが、弟といる時間は、とても楽しいです。

それに、私は昨年家庭科の授業で、実際に保育園に行ってきました。授業で作ったおもちゃを持って行き、赤ちゃんたちと一緒に遊ぶという体験でした。私たちの班は、いちばん小さい0歳児クラスに行ったので、泣いている子や先生に甘えている子が多く、保育士さんのお仕事の間近で見られて、貴重な経験になりました。他のクラスより先生の人数も多く、泣いている子がいたら優しくあやしたり、一緒におもちゃで遊んであげたりしていました。しかも、その間に日誌を書いたり、事務的な仕事もこなしていて、保育士さんて本当にすごいなと思いました。

そして、私も赤ちゃんたちと一緒に遊んで改めて「赤ちゃんて可愛いな。私も面倒を見てみたいな」と思いました。

三つめの理由は、最近のニュースで少子高齢化や、待機児童問題、保育士や保育所不足をよく目にし、何とかしたいなと思ったからです。

待機児童問題とは、子育ての中の親が、仕事や家庭の事情などで保育園等への入所を希望し申請しているにもかかわらず、入所できないで待機を余儀なくされている状況です。厚生労働省の発表によると待機所道の数は全国に四万五千人以上おり、五年ぶりに増加しているそうです。それに対して、保育園や保育士が足りていない深刻な状況が続いています。そんな中で、私も何か貢献できることがないかなと思いました。

まだはっきりと決めたわけではありませんが、人の役に立つ、特に子どもに関わる仕事につけたらいいなと改めて思いました。そして、これから迎える初めての進路選択は不安でいっぱいです。夢の実現に向けても困難は必ずやってきます。しかし、私はしっかりと前を向いて進んでいきます。そのためにもまずは勉強をがんばっていきたいと思います。

私たちの本当の「世界」は、どこへ行ってしまったのでしょうか。明日、いえ、もしかすると一秒後も命があるのかと、不安とともに生きる人々の願いは、もう聞き届けられる日は来ないのでしょうか。

国際問題。この単語を聞いて、あなたは何を思い浮かべますか。環境破壊、領土問題、貧困、戦争……。今、地球は数え切れない程の問題を抱えています。そして、近年よく耳にする問題が、戦争も含む世界平和の危機です。人間は昔から差別を繰り返し、今の時代まで受け継いでしまいました。宗教や民族、人種など、自分ではどうすることもできないものが、「差別」という名の壁をどんどん増やしています。これが、世界の現状です。

一体、何がこんな世界を作ってしまったのでしょうか。また、このような問題は、私たち日本人からは遠い存在なののでしょうか。

私の家はいわゆる転勤族で、様々な地方に行きました。その中で、どこに行ってもみてしまったもの。それは「いじめ」です。あることがきっかけで、いじめられている子の生活は大きく変わりました。それでも、何も言わないその子は、じっと我慢するだけ。いじめている人たちのその子に対する気持ちは「気に入らない」から「この子だったらいじめても大丈夫」に変化していったのです。「この子だったらいじめても良い」。もう、立派な差別です。このように、小さいですが立派な「差別」が、実は日本にも存在しているのです。

日本は、差別はあっても戦争などには発展していません。しかし、差別だけでは終わらない国が、世界にはあります。紛争や内戦、テロリズム。たくさんの人の命が奪われたり、難民が溢れたりします。故郷を追われ、行く当てもないままさまよいつける人。差別から逃れるため、あるいは自分の命を守るために身を隠さなければならない人。敵国の人に向かって石を投げつける、憎しみに満ちた子供。何かしたわけでもないのに、同じ人間なのに、自分たちと違う、ただそれだけの理由で相手に敵意を抱いてしまうのです。今の世界を作ったのは何か。その答えは、私たち人間の、相手を理解しようとしないうかさ、違いを認められない弱さ。どちらも、人間が生み出したものだったのです。

「差別」に手を出してしまったのは人間ですが、「平和」を呼び戻せるのも人間だけです。世界を良いものにするのも、状況をさらに悪化させるのも、私たち次第なのです。武器ではなく、温かい心を持って。暴力ではなく、笑顔で世界を満たせる人になる。そのために、まずは自分を見つめ、「今」を知ろうとしなければなりません。これが、私たちにできる、とても簡単で大切なことです。もう、差別のある歴史に終止符を打ちませんか。新しい世界へのドアを開けませんか。

住む所や考え方がそれぞれ違って、みんなこの地球に生まれ、同じ時を生きています。どんな人でも、かけがえのない「奇跡」の中にいるのです。今を生きる私たちは、誰一人として無くしてはならない、国境を越えた「家族」です。国、言葉、人種、文化、様々な違いがあつたとしても、私たちの深いつながりを消すことは誰にもできません。

「平和」は、「命」と同じくらい尊いもの。だからこそ、壊れやすいのです。しかし、私たちがつないだ手を離さなければ、「平和」もこの世界で生き続けられます。そして、忘れないでください。私も、あなたも、この瞬間を生きているものは全員「青い星の家族」の一員であることを。私たちの「青い星」は、家族の帰りを待っています。笑顔の花が一つ、また一つ、近い未来で世界中に咲き誇ることを夢見ながら。

僕は今、ラグビーを頑張っています。

僕がラグビーと出会ったのは、小学校六年生のときです。兄の試合を観に行ったときに、初めて「ラグビー」に触れました。そのときから、少しずつラグビーに興味を持ち始めて、中学校に上がり、ラグビー部に入部しました。一年生のときは、わからないことばかりで先輩にルールやスキルなどを教えてもらっていたけれど、だんだんと覚えられるようになっていきました。

そんな中、二年生の九月に、僕の人生を大きく変えることになる、ある出来事がありました。それはワールドカップでの日本代表の活躍です。ラグビーの日本代表は、それまでワールドカップで一勝しか挙げていませんでした。時には大差をつけられてしまった試合もあったそうです。しかし、今回のワールドカップでは、三勝という素晴らしい成績を残してくれました。特に、世界ランク三位の南アフリカとの試合で、大柄な相手と激しく戦っている姿を見て、かっこいいと思いました。しかし、なぜ小柄な日本代表が大柄な選手を相手に勝利を挙げることができたのか。それは、選手たちが一人一人責任を持ち、過酷なトレーニングに耐え、試合が終わる最後まであきらめずに戦っていたからだと思います。そのトレーニングと諦めない強い心がもたらした成果が身を結び、日本代表は南アフリカという強豪国に勝利を挙げることができたのだと思います。それから今でもたくさんのプロのラグビーの試合を観るようになりました。そこには体の小さい選手もたくさんいます。その小さい選手たちが体を張っている姿を見ると勇気をもらいます。僕も体は小さいので、小さいからこそできるプレーをプロの選手たちからたくさん学んでいます。

そのワールドカップを見てから、

「もっとラグビーのルールを覚えて、一試合でも多く他の中学校に勝ちたい。」

「ラグビーでたくさんの人に勇気や笑顔を与えたい。」

と思うようになりました。そして新チームで出場する初めての公式戦である新人戦では、地区大会で決勝まで駒を進めることができました。決勝では負けてしまいましたが、最後まで戦い、トライを挙げることができました得点差がついたことで、自分たちの足りない部分が明確になりました。そして自分たちの課題を改善するために、またたくさんの練習をしました。時には苦しい練習もありましたが、仲間たちと声をかけ合い、乗り越えてきました。僕たちも体は小さいですが、日本代表のように、体の大きい相手に対して低いタックルを試合で決められるように練習しています。試合でも、最後まで諦めずに戦えるような体力作りをしています。

このようにたくさん練習をしても、負けることはあります。負けると悔しいです。でも、その悔しさをバネに次の試合で勝てるようにまた練習をします。その気持ちが一番大事だと思います。そして、その気持ちがあるから、また頑張れるのだと思います。

僕は高校に行っても、ラグビーを続けたいと思っています。また、将来はラグビーの日本代表になって、たくさんの人に笑顔と感動を与えたいです。そのために、仲間たちと目標に向かってこれからも頑張っていきたいです。

私は、昨年の夏、機会がありインドネシアのジャカルタに一週間ほど滞在することになりました。インドネシアの空港に降りたとたん、今までいた世界とは違う、全く別の光景が目に入り、何も声が出せず、驚きでいっぱいでした。

ジャカルタは世界主要都市で、経済が大きく発展している都市なので、高層ビルが建ち並び、道路も整備され、都会的で洗練されているイメージでしたが、一步裏道に入れば、バイクの数が多く、車とバイクだらけでいつも渋滞でした。バイクは3人乗りは当たり前、中には5人乗りで運転している人たちもいました。バイクの音が町中に響きわたり、交通事情も最悪で、露店も不衛生、川はゴミだらけでにおいもくさくてきつかったです。また、町に買い物に出かけても、インドネシアの人は仕事中にメイクをしたり、スマホをいじったり、商売する気が全くないように見えました。それから、私は外国人居住区で寝泊まりしたのですが、その家は主人とメイドの玄関が別で、メイドの部屋やトイレは粗末なもので、そこに格差を感じました。私の中のインドネシアの印象はとても悪く、嫌いになりそうでした。

しかし、観光を続けているうちに、私のことを日本人と気づき、

「こんにちは」

「ありがとう」

と、日本語で声をかけてくれました。私は、海外の人を見てもどこの国の人なのかわかりません。それなのに、日本人と気づき、声をかけてくれたことがうれしかったです。また、現地の人から、

「一緒に写真撮ってもらえませんか。」

と言われました。私は、歓迎されているんだな、と思い、とてもうれしくなりました。

日本に帰ってきた後、インドネシアの歴史などについて調べてみると、昔から日本との関わりがあることを知りました。インドネシアは、昔、オランダの植民地でした。そして長い間、支配されていました。そこを独立しようとしたとき、手助けしたのが日本でした。ですから、インドネシアの人たちは、日本にいいイメージを持っているそうです。私自身は、何もしていないし、何かされたわけでもないのに、日本とインドネシアとの間に、そんなことがあると知っただけで、気分が良く、うれしい気持ちになりました。最初の頃は、インドネシアのことをよく思っていないでしたが、今では、インドネシアに行って良かったな、と思っています。また、インドネシアのことをとても身近に感じるようにもなりました。

大きな国と国とのつながりも、小さな人と人とのつながりから、始まっていくのだと思います。私はまだ中学生です。これからもっといろいろな人との出会いが、たくさんあると思います。その出会いから、人と人とのつながりの輪ができるのではないかと思います。それを大切に、一人一人を理解し合い、お互いのことを知ることで、もっと相手のことを好きになったり、相手に好かれたりするのではないのでしょうか。また、そこから人の輪が広がって一つになり、やがて、それが世界平和につながっていくのだと思います。

私は、消極的で、なかなか声がかけれなかったりするけれど、勇気をもって人との出会いを大切に、人との交流をもっと積極的にしていきたいと思っています。そしていつか、生きている人がすべて、平等に格差がなく、安心して生活できるような世界にしていきたいと思っています。争いのない、笑顔の広がる、そんな世界になればいいと思います。

## 社会への奉仕の心

岡部中学校 2年 須永 隼世

僕の尊敬する人物は日本資本主義の父といわれる深谷の郷土の偉人、澁澤栄一です。僕が特に尊敬しているのは彼が私利を追わず公益を図るという考えをもち、社会への奉仕の心を生涯にわたって、貫き通したことです。彼は第一国立銀行や東京証券取引所など約五百もの多種多様な企業の設立・経営に関わりました。それでも、自分の利益を求めず、日本の社会のために様々な事業を興し、成功させ、懸命に貢献しました。そのような彼の生き様に僕はとても心を打たれました。それから僕は経済に興味を持つようになりました。そして、僕も将来、澁澤栄一のように日本の経済を発展させ、社会に貢献したいと思いました。僕の夢はそれが実現できる経済産業省の官僚になることです。経済産業省の官僚になり、社会への奉仕の心を貫き通し日本や世界の経済を発展、活性化させたいです。特に日本の技術力を活かして人工知能や完全自動運転車などの開発を進めたいです。それが成功したら、さらにみんなの生活が豊かになると思い、とても楽しみです。また、経済格差をなくし全ての人が世界中で活躍できる社会をつくりたいです。それらを通して社会に貢献し、世界中の人が豊かで戦争や紛争がない平和な世の中にしたいです。

僕は社会に奉仕することの大切さを実感するできごとがありました。それは熊本地震です。ニュースなどで多くの人が被災し、困難に直面する姿を見て、自分にできることはないだろうかと考え、僕たち岡部中学校生徒会は募金活動を行いました。自分たちで募金箱を作り、街頭に立ち、やりがいを感じながら活動しました。たくさんの人に募金をしていただき、それを熊本や大分といった被災地に送ることができ、とても心が温かくなりました。今までの僕なら「被災した人がいたとしても自分には直接関係ない。」と思ってしまったことでしょう。しかし、今回は澁澤栄一の考え方を学んでいたのだから、社会に貢献する大切さとやりがいを感じることができました。そのおかげで自分の社会への奉仕の心を強いものにすることができたのだと思います。

そして僕は今、自分の夢を実現させるために何事にも全力で取り組んでいます。勉強ではグローバルに世界で活躍できるように、どんな教科も集中して学習に取り組んでいます。部活では心身を鍛えるために剣道部に所属し、部長として県大会出場を目指してチームを引っ張り、毎日稽古に励んでいます。そして僕が一番力を入れているのは生徒会本部役員としての活動です。社会に貢献するためにまず自分にできることは、学校に貢献することだと僕は考えました。皆がよりよい生活を送れるように何ができるかを常に考え、活動を進めています。この1年で様々な活動に取り組んできました。その中でも特にやりがいを感じたものは「エコあい」という活動です。「エコあい」とは岡部中学校生徒会の三大プロジェクトの1つで、「だれかのために、今できることを」をキャッチフレーズに、ペットボトルキャップを集める活動です。そのキャップ回収による利益はふっかちゃん福祉基金として深谷市の様々な福祉に使われます。昨年度、岡部中学校はその回収率で深谷市1位となり、表彰されました。中学生にとって社会のためにできることは少ないですが、この時僕は一人一人の自覚で大きなことを成し遂げられるすばらしさ、社会に貢献する意義を強く感じました。これからも夢の実現に向けて、一步一步努力を続けていきたいです。

## 人の役に立つということ

川本中学校 3年 宮崎 清一郎

「人の役に立ちたい。」

そんなことを、一度くらいは考えたことがありますか？私もそう考える一人です。人の役に立つと、自身が幸せになって、それが自分の自信につながるし、何より、人に笑顔になってもらえるから。

そんな私の夢は、「青年海外協力隊で働くこと」です。何それ？と思う人もいるかもしれませんが、まず、簡潔に説明させていただきます。青年海外協力隊とは、名前の通り、海外の最貧国で人助けをしたい人を募り、その人たちに実際に現地に行ってもらい、そこで自らの力を最大限に発揮してもらおう、といったものです。まさに、THE・最高にやりがいのある仕事！といえます。私はその一員となって、ボランティアをもっともっと増やし、全世界の人が国や人種を超えて思い合える世の中に一步でも近づきたいのです。

さて、説明はこの辺にして・・・。

私がなぜそのような夢をもつようになったのか、お話ししましょう。まず第一に、人の役に立てるからです。冒頭でもお話ししたように人にとって、人を喜ばせたり幸せにすることは、一番の幸福だと思うのです。皆さんも、困っている人を助けたときや、「ありがとう。」と言われたときに、心が温かくなるでしょう？それこそが、人が人からしかもらえない、最も贅沢な幸福なのです。

第二に、今までの自分を変えたいからです。私は幼い頃から周りの目をいつも気にしていました。自分が周りの目にどのように写っているのかがいつも気になり、目立たないように、周りに変に思われないうように生きてきました。そんな自分を、周りの目を気にせず、本当に相手のことを想える人にしたいと思ったのです。

愛情の代名詞であるマザーテレサは、こんなことを説いています。「愛されることより、愛することを。理解されるより、理解することを。」これを聞いて私は、「変わりたい！」と決意しました。今まで周りの目を気にしてばかりだったけれど、これからは自分が周りを気にしてみようよ、と言われた気がしたのです。現在、アフリカの最貧国では、五秒に一人のペースで五歳未満の子供たちの命が消えています。今、こうしてお話している、まさにこの瞬間に、小さな灯火が消え続けているのです。マザーテレサは、こんなことも説いています。「私たちは、大きいことはできません。小さなことを、大きな愛情をもって行うだけです。」

確かに、私たちは、最貧国に住む人々全員のお腹を満たすことはできません。しかし、何かできることがあるはずです。

例えば、募金もあるでしょう。お金を寄付することで、少しの人々の助けになってあげられます。

しかし、募金だけが、私たちができることではありません。今を一生懸命生きる貧しい子供たちに、「頑張れ！」と心の中で言うことも、また人助けになるはずですよ。そうすれば、少しだけ世界が輝いて見えるでしょう。人助けは、どんな形のものでも、今、人類が一番すべきことなのではないでしょうか。

今、私は夢に向かって奮闘中です。実際に人助けをしてみたり、相手の気持ちになって行動したりしています。先日は、JICA－国際協力機構にお伺いし、青年海外協力隊として実際に貧しい国の人々のために働いた人のお話を聞き、人助けについて、改めて深く考えさせられました。

今、私にできること、目の前に迫っている受験に、一生懸命勉強して立ち向かうこと、清掃や給食など、みんなで協力して進んで働くこと、家の人とたくさん話をする事、そんな一日一日を大切にしていきたいです。

そしていつか、夢を実現させ、貧しい子供たち全員に、笑顔の花を咲かせてみせます。



## 指揮者への道

花園中学校 3年 松本 俊祐

北の武蔵に名も高い 花咲く里の花園に 若い生命が逞しく 学の庭にいそしめる  
ここ中学は我が母校

「僕、やります。」、この一言から僕のリーダーへの旅は始まった。

皆さんにとって「リーダー」とはどのような存在・立場だろうか。

ここで、僕は「指揮者・そしてリーダーへの道」について主張してみたいと思う。

ある日、音楽の授業で先生が生徒たちに尋ねられた。その内容は、始業式・終業式や卒業式など大きな儀式には必ず校歌が歌われるが、その時の指揮者に立候補してくれる者はいないか。という内容だった。僕はこの話を聞いたとき、正直やりたくないなと思った。全校生徒の前で僕の下手な歌を聴かせたくないと思ったからだ。しかし、その反面やってみみたいという思いも少しだけあった。それから一週間何回も悩んだ。もしも、誰かが立候補していればそれでいいとも考えていた。それから数日後、また音楽の授業で先生が尋ねられた。僕はその時、勇気を出してついにこの言葉を言った。「先生、僕やります。」、この言葉には、少し大げさかもしれないが僕の指揮者そしてリーダーへの道を一步進むのだという強い思いが込められていた。

その週の後半から僕の指揮者・リーダーへの道が始まった。練習を始める前に、よい指揮者、よいリーダーとはどのような人なのかということ考えた。そして僕はよい指揮者・よいリーダーとは、大勢の人の前でも堂々としていられる人間だと考えた。

最初は先生に何度もダメ出しされた。だが、全ては自分のためだと真剣に取り組んだ。次の日は吹奏楽部のみんなの協力を得て、練習した。先生、吹奏楽部の生徒からは一応に僕の顔の表情が硬いと言われた。しかし、よい練習になった。練習が終わった途端、緊張がほぐれ、気分が爽快になった。この時の爽快感が忘れられなくなった。

次の日からは春休みに入り、学校での練習ができなかった。だから、家で先生に教わった事を思い出しながら一つ一つ丁寧に練習した。特にみんなに指摘された顔の表情、生徒へのコメント、そして自分の発声練習を重点的に行った。

休みが明け、ついに本番の1学期始業式を迎えた。朝からずっと緊張していた。学校へ行くと、先生やクラスメイトから沢山の応援をもらった。そのときは本当に嬉しかった。それと同時に絶対に成功してやるという気持ちになった。そして、ついに本番を迎えた。しかし、いきなり校歌の練習で歌詞を間違えた。とても恥ずかしかった。練習が終わり、すぐに本番になった。ミスことは忘れ気持ちを切り替えて本番には臨もうと考えた。本番は間違えることなく終え、なんとか成功した。しかし、自分なりに反省した。400人近くの前で指揮者をしたことにより、様々な成果を得ることができた。一方、今回の経験からまた新たな課題も見つかった。その課題を次回までに修正し、もう一段階成長した姿で次を迎えたい。

僕は2学期も3学期も指揮者を続けていく。その時に出た課題を把握し、回数を重ねるごとに上達するように日々精進していくつもりだ。大勢の人の前で何かを完璧に披露することは非常に難しく、大変な勇気のいることだと思う。そして、それは誰にでもできることではない。しかし、それをできる人もいるのは確かなことだ。そんな人をリーダーと呼ぶのだろう。リーダーは人の意見に左右されず、しかも意見はしっかりと聞き、つよい意思を持っている人だろう。つまり、この二つが備えられた人こそ、沢山の人の信頼される真のリーダーであろう。ぼくもそんな人に一歩ずつでも近づける指揮者・リーダーとしての道を歩んでいきたい。

今回、思い切って指揮者に立候補して本当に良かった。迷いの中から一歩前に進むことで僕の知らない世界や風景を感じることができた。僕はこれからも立ち止まることなく、失敗を恐れることなくあらゆるものにチャレンジしていく勇気を持たた。これは僕の大きな財産となった。

## マナーについて考える

東京成徳大学深谷中学校 1年 作山 優衣

私は毎日の登下校で電車を利用していますが、大きな声でおしゃべりをする人、必要以上の音量で音楽を聴く人、パンやお菓子を食べる人、ジュースを飲む人、出たゴミをそのまま車中に残して下車する人、こういった人を、時折目の当たりにします。こんな時、私は不快な気分になってしまいます。

大きな声でおしゃべりしたから、必要以上の音量で音楽を聴いたから、パンやお菓子を食べたから、ジュースを飲んだから、出たゴミをそのまま車中に残して下車したからといって、罰せられることはありません。しかし、こういった光景を目の当たりにした多くの人は不快な気持ちになると思います。電車は多くの人利用する公共の交通機関です。利用する人が気持ちよく利用できるということが大切です。そのためには、電車を利用する人が「マナー」を守ることが必要だと思います。

そこで、「マナー」について考えてみました。テーブルマナーに、ケータイやスマホのマナー、「マナー」は私たちの生活の中にたくさんあると思います。テーブルマナーという一流のレストランやホテルで食事をする時に必要なもので、ちょっと堅苦しいイメージがありますが、食事のマナーで最も大切なことは、ナイフやフォークの持ち方よりも、その場にいる人たちと楽しく食事ができることが一番のマナーだと聞きました。ケータイやスマホのマナーでは、相手を思いやることを忘れないようにと教わりました。テーブルマナーにしろケータイやスマホのマナーにしろ、どちらも「一人」の時には求められないものです。私たち人間は、一人暮らしはできたとしても一人で生きていくことはできません。ですから、私たちの生活の中に「マナー」はどうしても必要だと思うのです。

ところで、「マナー」とともに、「ルール」という言葉もよく耳にします。「ルール」もまた、私たちの日常生活の中で必要なものだと思いますが、その違いは何でしょうか。「交通」ということで考えてみました。信号無視やスピードの出し過ぎ、免許証の不携帯などは、罰金が科せられたり減点されたりといった罰則があります。つまり、必ず守らなければならない規則として定められているのが「ルール」です。これに対して、無理な割り込みをしない、渋滞中の合流は一台ずつ行う、道を譲ってもらったらお礼をするなどといったことは、必ず守らなければならないというものではなく、守らなかったからといって罰金が科せられたり減点されたりといった罰則はありません。しかし、守ることでお互いが気持ちよく過ごすことができます。つまり、お互いが心地よく過ごすための思いやりの気持ちと行動が「マナー」だと思います。

私自身、全ての場面で思いやりの気持ちと行動がとれているとは思っていません。しかし、少なくとも、思いやりの気持ちと行動がとれるように心がけて、毎日の生活を送っていきたいと思っています。

「お疲れ様でした。クランクアップ。」

監督の声が聞こえた瞬間、私の目からは自然と涙がこぼれ落ちました。この時の映画の撮影は、私を変えてくれた、かけがえのない思い出です。

私の将来の夢は、役者になることです。小学校に上がる前から、テレビや映画に出演されている役者さん達の演技を見ている内に、それは憧れから夢へと変わっていきました。そして、小学四年生の時、私は事務所に入りました。演技、歌、ダンスのレッスンを週に一回、順番で受けました。毎週毎週違ったレッスンを受ける中でも、演技のレッスンが一番好きでした。実際にやってみるとなかなか上手くできないのですが、「他人を演じる」ことに面白味を感じていました。しかし、ただ面白いだけでは仕事をもらうことはできません。周りの同年代に勝つための工夫が必要です。そこで、私は、喜怒哀楽をはっきり表現すること、また、声の強弱や身振り手振り、表情の動かし方を工夫するようにしました。すると、以前に比べ、演技の質が良くなってきたのか、小さい仕事から徐々にもらえるようになりました。

そうした中、小学五年生の夏休み、私にとって夢への考え方を変える大きな転機が訪れました。私に、秋田県で撮影される映画の準主役という大きな仕事が回ってきたのです。はじめは自分の力を発揮できるいいチャンスだと張り切っていました。しかし、そう簡単にはいきませんでした。読み合わせの時から、周りの大人の迫力に押され、自分の演技ができなくなりました。焦り続ける中で、「役を本気で演じるとはどういうことか」と考えるようになりました。その思いを演技の先生に伝えると、「演じるとは、自分自身を捨てることだ」と言われました。先生は演じ始めた瞬間、目つきも、動き方も、映画の登場人物そのものになります。その迫真の演技の中で練習を積むうちに、私の演技が変わってきたように思います。「本気で演じる」に少し近づけた気がしました。

クランクイン当日、母と共に撮影現場である秋田に向かいました。期待と不安を抱きながら、撮影がスタートしました。スタッフや、出演される役者さんなど、たくさんの方々が仕事をこなしていて、一つの映画を作るには、これだけ多くの人々が動き、責任を果たさなければならないのだと知りました。現場では、憧れていた役者の世界の面白さを感じて、自分の役に没頭しながらシーンをこなしていきました。そんなとき、家にいた父から、二歳年下の妹が高熱を出したという連絡が来ました。「撮影場所の秋田にいた母の代わりに、妹は家のことを頑張りすぎてしまったのだろうか、私のせいではないか」と、自分を責め、妹の容態を心配していると、つらいはずの妹から電話があり、逆に「頑張って」と応援されました。この時、私は、純粹に自分の夢を追いかけられることは本当に幸せなことだと気づきました。家族をはじめ、多くの方々に支えられて、今こうして頑張れているのだと思い、感謝の気持ちでいっぱいになりました。あの時、周りを見つめ、役者ができることの喜びを改めて感じたことで、さらに演技に打ち込めるようになった気がします。

そして迎えたラストシーン。どこからくるのかわからない重圧と、役を楽しみたいという私の思いが交錯しました。結果は、一発OK。私は安心し、思わずふうーと息を吐きました。「お疲れ様でした。クランクアップ。」という監督の声が聞こえた瞬間、私の胸には喜びが込み上げてきました。

役を演じることに、完璧という限りはありません。役者の魅力は、役になり演じきったときの達成感にあると思います。また、様々な役を演じる中で、いろいろな考え方や生き方を体験できます。これはきっと心の成長にも繋がるはずです。私を支えて下さる家族や周りの方々への感謝と、夢を追いかけられる幸せを忘れずに、この役者という魅力ある夢の実現を目指して、努力していきたいです。